

活動状況報告（9月）

学生留学コース 5期生 上野 瞭子

フランスに到着してから、1ヶ月半が経ちました。私が滞在しているフランス・レンヌは北海道よりも北に位置しているため、コートなしで外に出ることができない程、寒くなってきました。

レンヌ政治学院では、留学生を対象としたイベントが頻繁に開催されます。今月の報告では、それらのイベントの中から“Buffet International”を紹介します。

この“Buffet International”とは、留学生が、自分の国の料理やお菓子を持ち寄って、みんなで食べるというイベントです。ドイツからはポテトサラダ、韓国からはチヂミ、ベルギーからはチョコレートなどテーブルには様々な料理やお菓子が並びました。今では、日本でも、世界の料理を食べることができますが、現地の人々が作った料理はひと味違います。そして、私は、北海道の名物「白い恋人」を持参しました。テーブルからすぐになくなってしまおう程の人気の、友人からも「チョコレート部分が美味しい。“北海道”という場所は、知らないけれども、美味しいものがあるから、行ってみたい。」という感想をもらいました。本場の味を堪能できたと同時に、北海道の魅力を少しでも伝えることができ、とても有意義なイベントでした。

8月下旬からは、レンヌ政治学院での講義も始まり、この報告書を書いている時点で1学期の半分が過ぎようとしています。レンヌ政治学院では、GEP(政治学修士課程)を取得するために、各学期ごとに、留学生のための必修科目を3つと、フランス人の正規生に混じって受ける選択必修科目を3つ受講し、単位を取得しなければなりません。選択必修科目では「法学入門」「私法」「契約法」「国際人権法」といった、私の目標である「海外取引に強い弁護士になる」ために必要な講義を選択しています。

今月の報告では、初めて海外での講義を受けた感想を記そうと思います。フランスの大学の講義を受けて、一番驚いたのが、学生は、教師が言ったことを一字一句メモしていることです。もちろん、教室の前にレジュメをスクリーンに映して説明する教師もいますが、そのレジュメは学生に配られることはありません。また、学生もレジュメを写して、そのレジュメに補足するというわけでもありません。学生は、教師が言ったことを一字一句メモしているため、講義中はタイピングの音が鳴り止まないのです。

少なくとも私が受けていた日本の大学・大学院では、レジュメや教科書に補足してメモすることが多かったです。また、ドイツや中国など、日本以外の国からの留学生に自国での講義の受け方について聞きくと、日本と変わるところはなく、“C’est bizarre!(奇妙だ!)”と言っていました。

これに対して、フランス人に、この講義の受け方について聞いたところ「学生は、講義の重要な部分をわかっているはずがないから、教師が言ったことを全てメモすることが当たり前なんだ」という回答が返ってきました。なるほど、フランス人の講義の受け方にも納得できます。しかし、正直、留学生にとって全てを追うこと困難です。

そこで、現時点では、講義中は聞き取れた内容をメモし、講義後、フランス人に講義メモを見せてもらって答え合わせをする、という流れを繰り返しています。そして、学期終了までに、自分自身でフランス人と変わらない講義メモを作成できるようになることが目標です。

さて、フランスでは、コロナ禍前とほとんど変わらない生活に戻っています。マスクを着けている人はいません。それでも、手洗いうがいを忘れずに、健康に気をつけて、しっかりと学修に励みます。

